

この数字の数だけ 人生があるのにな

母

母がそう 呟つぶやいた時、テレビ画面には今日の新型コロナ感染者数が大きく表示されていた。

医療の現場で働く母は、人の生と死を間近に感じているからこそ、思わずこの言葉がでたのだろう。日々増えていく感染者数を見て、数の増減でしか感じられなくなっていた自分に気づいた。途端にその一が自分に思えてきた。私が病気になったら、悲しむ人の顔が浮かぶ。とても他人事とは思えなくなった。

ちょうど今日は終戦の日だ。世界中の誰もが、一は自分や自分の大切な人かもしれないと感じられたら、もっと平和な世界になるのだろうか。数えきれない戦争犠牲者の単なる数字でない人生を思い浮かべ、戦争の無い世界を願った。

受賞にあたって

母親は医療従事者で、普段から、患者さんに一人の人として向き合おうとしています。今回、コロナ禍でこのつぶやきを聞いた時、それを思い、はっとしました。リスクもある中で、患者さんときちんと向きあつて、人の命を無駄にしないようにと働く母親は憧れです。将来は私も人々を笑顔にできる仕事をしたい。そのためにも、いまは高校受験に向け勉強を頑張っています。